

(1)

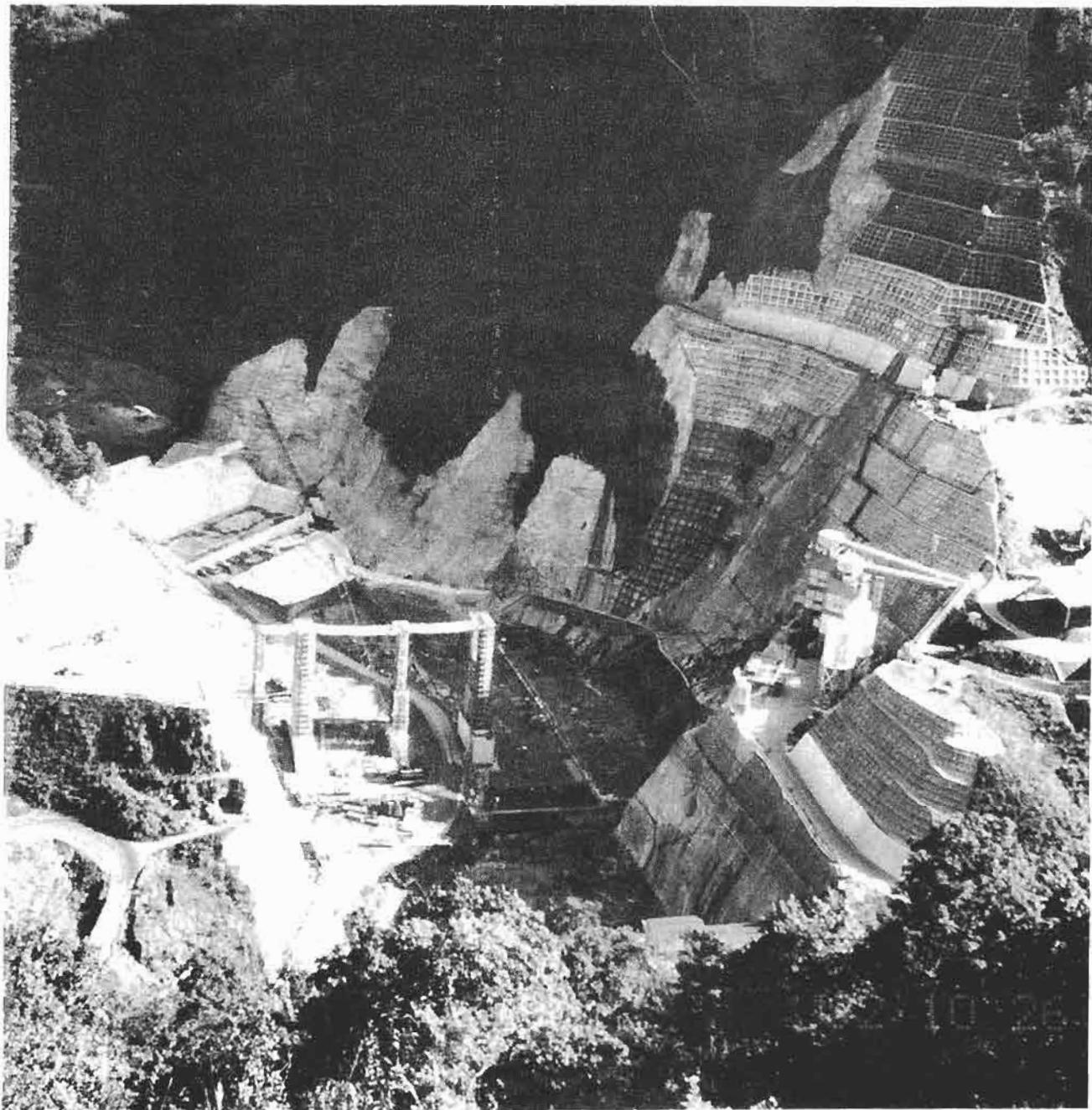
なかかわねふるさとつうしん -27-

平成4年11月30日発行

中川根ふる里通信

= 第27号 =

編集・発行・モアラフ中川根
連絡先 TEL 428-03
静岡県榛原郡中川根町上長尾
ふる里通信係 857-6
郵便振替
口座〈名古屋〉7-81556



大井川上流 多目的ダム 長島ダム
建設工事進行中 建設省

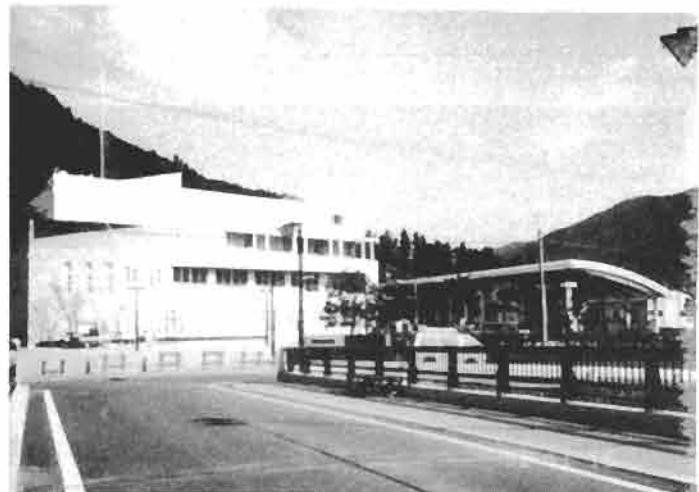
中川根町 町制施行30周年

11月21日 記念式典が庁舎落成式と共に行われました。

昭和三十七年 町制施行により村
が町となつて三十年 新たに出发
にふさわしく 後湯も右の様なす
ほらの建物になりまつた。
場所は上長尾・長尾川沿い。昔
いはんだしと言われに所です。
山村開発センター・健康増進施設
(体育館)と共に町の中心となり
ます。

過疎・高齢化、農林業の不振とか
かかる課題は難題ばかり・町民の

意識と町政の好リードにより中川
根を守りたいものです。



町民憲章

わたしたちは、茶の香ただよう緑
の大地上に住み、恵まれた自然と
清らかな流れの大井川を愛する
中川根町民です。

この美しい郷土と伝統ある文化
を守り、健康で明るく、住みよい
町をつくるため、この憲章を定め
ます。

一 あふれる緑と、輝く清流を守り
豊かな自然を育てます。

一 いきいきと汗を流し、生きがいを
もつて、活気ある生活を
おくります。

一 生涯を通じて自らを高め、
誇りある歴史と文化を次代に
伝えます。

一 はつらつと行動し、健康で
笑顔あふれる町をつくります。

一 思いやりの心を持ち、
お互に認めあう社会を
築きます。

後湯内部、右町民ギャラリー



11月22日、23日、記念 産業文化祭

産業文化祭は 30周年記念もかねて、
盛大に行われました。

特設会場では、お琴の演奏や、コーラス、鼻緒
など町民の特技の披露や、小学校時代から田舎口
ですごされたタレントの竹内雅子さんのステージ
など、いろいろの催しがあり、大変に盛り上がりでした。
スナップ写真と紹介致します。



ハッピ姿の町長と西沢勝良さん



婦人会のバザー。そば屋さん。

おいしいわんこそばはもちろん、手づくり
をすすめています。右端 中原会長。



展示物 炙き物や俳句、川柳など



庁舎2階、3階より餅まけ

早く投げてくりよーう。
わっちら、まってるだごーー
おまっち、すーこいでー



後場前広場の町の皆さん。

寄稿 工ッセイ



川根弁は永遠に…

生まれ育った川根を離れて、都会(?)で居を構え生活している同窓生の男女数人と、たまに集合し、飲食しながら、馬鹿話をすることがある。

こんな時、初めはそれでも普通の話しかで喋っているのだが、少しずつアルコールも入り、話に興じてくると、もうどうしようもない、あの川根弁と、語尾に独特のインントネーションのある話し方にになってくる。

特に某君はどほひどいもので、あたりかまわらず大声で途々と喋り続ける。店の従業員や他の客も、最初はチラチラ二ちらの集団の異様な話しか方に耳目をそば立てているが、そのうち次第に何かよそ者を見るような軽蔑に近い態度に変れる。——こんな時、「もしかして、あんたちやあ、川根の出かね。」などと鋭い直感と、高い確率で話しかけてくる客もたまにある——

そんなやりとりをしながら、他の客のホツとーにような眼差しを背にして、二次会へと繰り出す。街を歩きながらも大声で雑談は続き、すれちがう通行人も異様な集団に意をよけながら振り向いて行く。

「ですけて歩いてるとあぶんないせ。がらいか、車にはねられて、あいまちでもしたらどうするだや。全くおまいも、ゆるせかあないなあ」

「このスナックだけん、前に来たこヒがあるんで入ってみるか。わりかし、いかくて、こぎたなくもないし、ごせっぽい店だよ」

「ほうかあ……おぞい店でもないし、かまつたこたアな

ちの地をさうけだし、終いには開キ直つて、昔話と、近況

報告の雑談に花が咲き、夜も更けてゆく次第となるわけ

です。

「マア、ワタシ、こんなおいしいお料理、久しぶりにいただ

いたワ」なんて言おうものなら、

「ほいじやあ、二次会にカラオケでも行かさあ」

「おまい、どつか知ってる店もあるだかやあ」

「別に知らんけんせー。ほいでもそいあ、あいんで

みりやあ、どつかあるういええ女衆も行くすりあ。一
緒にこいよさい」

「じうしがなあ、はあ、かいだるいでなあ、おまいつち
やあ、ふとくにみがましいっていうか、まめたいたねえ。

他人の下手な歌あ、あおたいで聞いてるのもやくた
いもないし、ほれにさあ、歌えていわれるときほつたく

なるだよ」

らもなく、他の客の歌など無関心で、ただひたすら大声で、川根井が入り乱れる。

「水割り、ちゃんとこにあせてくりよ。濃いと飲みえん」

「歌詞カードかしやう。……ひっぽかいてよこて、こうがわくなあ」

「やい、おまいが、じょうや唄う（木曾路の女）いれつか」

「ほいじゃあ、唄つてこすかなあ、ほいだけん、最近よく見えないだよ。見てこつい字が……」

「やつまに履いだつけ」

「あれじやあないだか、老眼」

「がらいか、マイクを落といてくますなよ」

「はあ、遅くなつたし、明日も仕事だし、ほちほち帰らざ」

まあ、こんな調子で同郷の友と心ゆくまで語り合えるひとときは、何にもかえがたいものである。

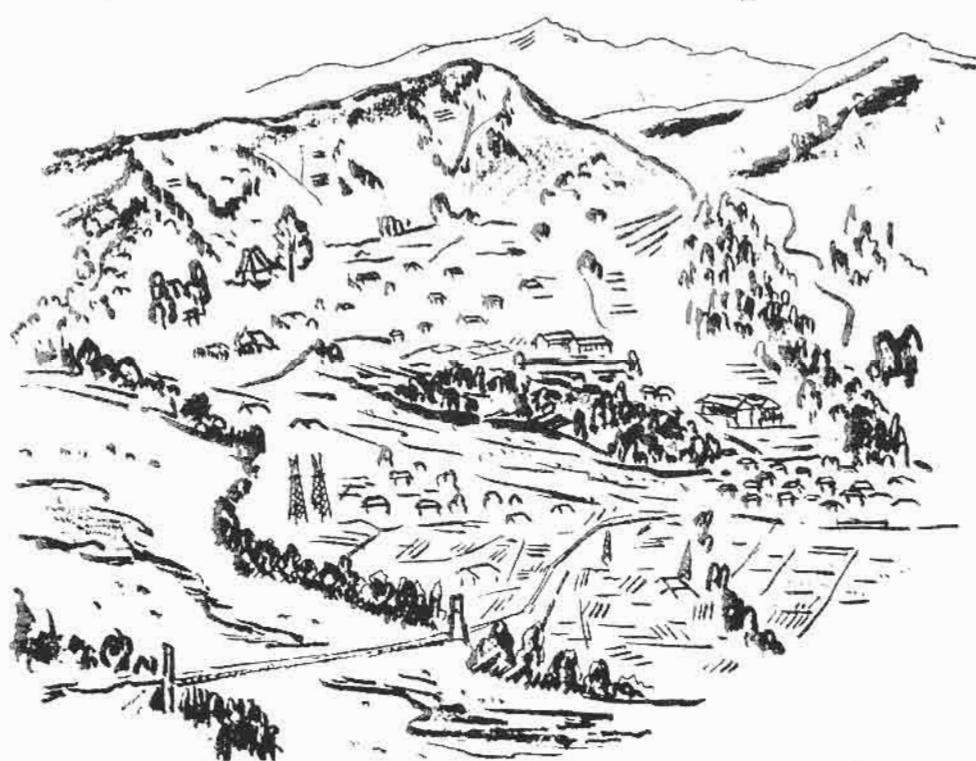
しかししながら、日常会話における川根井のニュアンスは、少しずつ趣を変えながら、自分やまわりから消えてゆくよう気がしてならない。これも時代の流れなのだろうか。

先日、久しぶりに帰省した折、幼い頃、友と日の暮れるまで遊びまくった、故郷の小高い山を歩いてみた。秋も深まり色づき始めた雑木林を散策しながら立ち止まり、眼下を見下ろすと、昔と変わらぬのとかな集落のたたずまいが見渡せた。

「都会の喧騒と、あわただしさがここにはない。——山あいからSしの汽笛が聞こえてくる。あの絞り出すようなもの悲しい音は、心のふるさと川根路を偲ぶ鄉

愁と哀愁が入り混じった響きとして耳に残る。（言ってみれば、演歌の船村徹の世界だ？）
同郷の友とのふれあい、そして生まれ育った故郷の自然とのふれあいを思う時、やはり川根井抜きでは語れない。川根井よ永遠に……

清水市在住 中村勝さん
引用 鈴木茂夫の収集「徳山地方方言集」



昭和32年度 徳山中学校卒業生同窓会が9月14日～15日 伊東市に於て開催されました。東京にお住まいの鈴木茂夫さんより、お便りが届きました。ふるさとのなまり = さら = なつかしい……、あれにたしい世の中、ほっこり、ひと息、木々を渡る風の音に聞こえます。いつもこも聞こえていいでー。

特集徳山城も最終回となりました。沼館先生の結言をして現在の城址の様子を案内してまいります。

無双連山を中心とする諸城址の研究

沼 館 愛 三

(2) 防御配備

無双連山は、その山嶺を中心として、四方に多数の尾根を派生している。その尾根は少なくとも十二を算えることが出来る。そして尾根の山脚は極めて峻岨ではあるが、相当な時日と費せば、近接不可能ではない。この様な、とからも、地形の峻岨に安心して、そのまま放置することは出来ないから、各尾根に対して、万遍なく堅設陣等を配置して、防御設備を整している。しかし、それは徒らに兵力を分散して、至るところ、兵力の不足を感じ、各所に弱点を形成するのである。

又、山頂を中心とする放射的配置に対しては、攻者は正面からの正攻法は徒らに損害と時間を空費するのみであるから、勢い他に迂回して其の弱点と思われる方面に兵力を集中するのは、戦術上自然の状態である。この理由からして、文沢一毫町河内間の物资貯蔵区域、即ち根小屋地帯は、これを確保するは勿論であるが、その地方の弱点に対する、防備の重点を置く必要はある。昔の築城家は、山城を構築する際、如何なる点に着目したかと云うと

(1) 至って高き山の頂きは用捨あるべきこと

(2) 外よりの用水は、大いに嫌うこと

(3) 尾根は先づまりたるを用ひべきこと



特集 德山城 最終回

(1) 山下に根小屋を設けるべきことあること
(2) 敵を山下に受け、城内よりの働き便ある如く、山を取り立てること

かつては、殊に(1)に対しては、地域広大にして、且つ派生する尾根が複雑多岐である為、敵が山下に肉迫しても、城内より適時応援するとの出来ない地形であったのは、本城の最も不利とするところであった。

山城の防御は、敵の近接が容易でない代わりに、攻者に行動の自由と、攻撃の手段方法において、又、自由を与えるものである。昔は、山城攻撃に如何なる手段方法を取つたかと云うと、

(1) 先ず水の手の切断

(2) 根小屋の焼却

(3) 対の峰を占領して軍の威容を示し、且つ攻撃の準備を整へたこと

(4) 一向に裏の心得のこと、即ち背面攻撃のこと

(5) かえり要害付、向城付城のこと

などで、先ず根小屋を占領して、給養方面へ打撃を与えて、相対する要害の地を占領して、優勢なる態勢軍容を示して、精神的方面への打撃を加え、更に別道を探り、迂回包囲して、先ず付属の支城砦を攻略し、本城をして孤立無援に陥らせるもので、本城攻撃の今川氏、伊達景宗等が取った戦法は、この要領によく合致していた。

しかし、本城は兵力に比し、あまりに広大過ぎるの事はあつたが、里段の配置や砦・出丸などの施設に於て、現在の遺構に微しても、実に巧妙であった。その規模の点に於ては、遙かに安倍城をしのぎ、山城とし

ては、当地方に於て実に模範的のものであった。

支城中最も重要なものは、護心土城と朝日山の砦である。護心土城は、その防備配備に於ても、かなり堅固であったが、その規模は狭小であるのと、本城から四キロ以上も離れており、しかも両者の連絡線は、高山を通ずる尾根上の一本の小径に過ぎないので、敵の為遮断された時は、孤立無援となり、壊滅はただ時間の問題となるばかりである。

本城との中間に当る高山に、更に防御設備をばらばらに距離も本城とは二キロ内外であるし、洗沢、合土の如く、諸道の集合点でないから、極めて適當ではあるが、たゞこの地は、護心土と異なり、標高一〇九ローメートルもあり、水の手に乏しく殆どない、これが非常の欠点であった為、築城しなかつたのである。

日向の秋多和城は、合土、洗沢は交通上よりして扇の要であるのに反し、その末端にあるから、隨時敵の包囲を受けるのは、覚悟せねばならない。從つて、この方面に、堅固なる築城をなすのは、極めて不得策である。

四伝多和の砦は、本城への物資補給路の入口に当たり、極めて緊要であったから、当砦の得失はやがて本城の運命に關するのである。正平八年二月十八日の当砦陥落は、忽ちにして本城を壊滅せしめたに織しても、推測することができる。

寺の沢、壱町河内、文沢などの要地は、優勢なる敵の包囲に対しては、占領される事は、覚悟しなければならぬ



森之段より 德山地区東北部 中央山頂は

朝日山砦付近



(3) 物資・資源に関する設備
本城と、その居館である堀之内、森之段とは、約四キロの距離があるから、優勢なる敵に對しては、この両者は忽ちに遮断分離される事は明らかである。常住居館の堀之内や小長井天王山の徳谷城は、大井河谷の物資を収集できるから、居館の位置としては適當で、該地に資源を求める、物資を準備する、とは容易であるが、一旦、本城との連絡が遮断された場合は、防備が薄弱であるから、忽ちにして侵掠されるのである。

故に、徳山城の命脈を保持せんがため、本城に近い位置に物資を集積する第二段の策を取らねばならぬ。そこで本城の周圍に於て、その位置を求めるとするならば、文沢、壱町河内の谷地である。

ここは、無双連山と塙野、梶山などの高地の中間にあり、秘匿集積するには好都合であり、尾根伝いに本城との連絡も容易であるから、土岐氏は、ここに相当の設備をしたらしい。

谷所（矢所）の武器製作場、梶山（鍛冶山）の鍛刀所や寺の沢の寺院人家の米塙貯蔵など、それである。そしてこれを防備する為に、朝日山、四傳多和の堅壁や、梶山、塙野などの堅砦が多くこの方面に設けられた。

四傳多和の砦は、本城への物資補給路の入口に当たり、極めて緊要であったから、当砦の得失はやがて本城の運命に關するのである。正平八年二月十八日の当砦陥落は、忽ちにして本城を壊滅せしめたに織しても、推測することができる。

く、更に第三段の策として、山上に、巣屋敷や、鐵治場などを設けている。しかし、その地域は狭小であるから、余程平素から準備して置かなければ、長く本城の命脈を保持することは出来ない。その補給が絶えると即ち、陥落となるわけである。本城に対する物資の補給ということは、かなり考慮された問題であつたろう。

五 結 言

之を要するに、本城砦群は、天然の要害に據り巧妙に築城せられたのであるが、その兵力に比し、規模宏大に過ぎない、ところ弱点を形成して、遂に没落の悲運に陥るに至るのである。

然れども、その遺構に就て見るに、築城の型式や、地形、交通網の利用や、山地に於ける戦闘方略等に於ても吾人の学ぶべきものが頗る多く、又、これらの城砦を中心として、集落が発達し、文化を進め、或は南朝方として奮戦する戦王の事蹟は、大に地方郷土子弟の精神的教育の資料となるのである。

故に、この遺跡の保存を図ると共に、事蹟を解明して、先人の偉業を光輝あらしめる如くすむは、郷土後昆の責務ではあるまいか。

一 完 一

余録

いかがでしにか、無双連山を中心とする諸城址の研究は、沼館先生は當時、静岡市安東三丁目に住んでいた。その地は現在安東二丁目となっています。旧地は近藤勝さんと言つて、お住いになられ、「あの地方の家族様は、お国(青森県)の方へ行かれたようです」と年を重ねられた奥様がおられて下さいました。

現 地 の 様 子

無双連山へ登るには、沢山のコースがあります。

・徳山、沢脇方面から
・青部から林道を登る（途中で同じコースになります）

・壱町河内から寺の沢をさの尾根道

・文沢から林道を登る

・富士城(合土、本川根町)、高山の山岳ルート

・世間方面より

など、多様です。林道は車で行けますが、路面は悪く特に青部からの道は荒土が走り思わずあります。山頂まではどのコースも徒步となり、全部徒步となると登り四時間はかかります。(林道車を利用すれば四口分) (一時間の徒步)

十年ほど前に町史研究会で、無双連山へ勉強に行つたことがあります。(林道車を利用すれば四口分) (一時間の徒步) 那先生(徳山)にいろいろ教えていただいたのですが、徳山城の知識も豊富で、登山気分で自然満喫、大切なことを(巣屋敷関係等) 説明)を全然覚えなかつたことが後悔されます。

平成二年十一月二十五日、城址調査が行なわれました。(六人) 文沢よりの登りを試みました。手がありは、徳山城関係図、同見取図、中川根町全図を使用しました。

林道から沢沿いの急坂尾根道を、一時間ほど登ると、無双連山最高部(二千ロード)にあります。尾根を東にして、西側に起伏に富んだ広場があります。現在杉林となっていて、見分けにくいが、城址見取図のようだ。地形がはっきり残っています。ここが巣屋敷(本丸)址であることが判ります。特に、文沢側より、腰郭南北に長い平地、それに並行す



殿屋敷 清水砦間の雑所 犬戾り 屋根の上のごとし

殿屋敷から北上して行くと、犬戾りと言う両岸絶壁の尾根上に一すじの道があります。画面には幅一、二メートルあります。現在最も六口山と年がたつにつけ、尾根はやせていて、ただ崖の斜面には、雜木や草が茂り、あまり跡が怖感はありません。その間約一五メートルやかで、清水砦址にたどりつきます。ここは高山方面及び青部、徳山方面からの登り道です。

殿屋敷から南下していくと、空壟址があります。ここは誰もが確認出来る壙址です。なお南下して行くと、陣屋平に出て、この付近は中部電力の無線反射鏡(鏡)取付地帯になつており、地形がいちじろしく変化していきます。

笹間へ行く道、二等三角点(一ロハ三・三九)を確認することができます。なお南下して、鐵治屋敷、蔵屋敷跡は、四〇年生位の杉林となつていて、目印もなくどこかと、やうやく判らぬのが現状です。やがて本城ナギの頭の一部に到達します。

蔵屋敷は十ヶの頭があり、年々くすれ去つて、その日は何もしないで帰りました。山の神様のごき

る土壘(高さ三メートル、幅一、二メートル)は、見取図のまま残っています。本丸部分は凹地のため、郭吐など細部は確認出来ませんが、東側が本丸を守る為の高い土手となっており、その上部に腰郭が残されています。

殿屋敷から北上して行くと、犬戾りと言った両岸絶壁の尾根上に一すじの道があります。画面には幅一、二メートルあります。現在最も六口山と年がたつにつけ、尾根はやせていて、ただ崖の斜面には、雜木や草が茂り、あまり跡が怖感はありません。その間約一五メートルやかで、清水砦址にたどりつきます。ここは高山方面及び青部、徳山方面からの登り道です。

殿屋敷から南下していくと、空壟址があります。ここは誰もが確認出来る壙址です。なお南下して行くと、陣屋平に出て、この付近は中部電力の無線反射鏡(鏡)取付地帯になつており、地形がいちじろしく変化していきます。

以上、調査の内容をかいつまんで申し上げました。同行者一同、徳山城址の規模のあまりに広大なことに、改めて驚いたことは、言うまでもありません。

この日、もう一ヶ所(四合多和砦址)を調査する予定でしたが、晚秋のと、時間的に無理を感じ、またの機会にして、寺沢村跡と入屋さん裏の五輪の塔を見せていただき、帰りました。城址等写真撮影も到しましたが、出来上つた写真は似たような杉林ばかりで、位置地形の判断もつきかね、実測も兼ねた写真撮影は、後日改めて挑戦することにしました。

平成三年五月四日、二回目調査は、青部林道より登りました。(三人)清水砦、犬戾りを経るまでは順調でしたが、本城北口の広場にて何を誤ったのか、東側に伸びる尾根に踏み込んでしまいました。三口山の巻尺のせいには出来ませんが、道もあり、本城尾根と似ている地形もあり、進んでいるうち、西方がひらけ、遙か西上山棱に反射鏡が見えました。——とんでもない所へ来てしまつた——急ぎ引き返しましたが、気力体力使い果たしてしまつた——急ぎ引き返しましたが、気力体力を使い果たしてしまつた——急ぎ引き返しましたが、気力体力を使い果たしてしまつた。山の神様のごき



殿屋敷の、腰郭付近 20年生くらいの杉林

げんが、悪かったのかも知れません。

平成三年八月十六日、三回目の調査を行いました。(夏(季)二十二人)
青部林道を車で送つてもらい、前回の二の舞は踏まないと、調査
に五時間の余裕を取り、慎重に取りかかりました。

殿屋敷止の写真撮影は比較的よくできましたが、実測となる
と、測量技術もなく下草も茂り、広範囲を巻尺に振り回わさ
れ、時間はかかり、実測が歩測に変わり、歩測が目視となり
思う成果は得られませんでした。

陣屋平二等三角点の所は四メートル四方くらい、林が切れで日射
しがあたっています。そこには何と、マムシが迎えてくれます。
鳥子もまた中学生、恐ろしがって帰路を促します。戻屋
敷ナギ方面は歩測と写真撮影だけに一通りでした。

再版本発行と産業文化祭展示発表

沼館先生の論文を見てから、今一度、なるべく

元本通りに再発行して、沼館先生のこと、歴史
的事実など、広く知っていたい、と考えています。

原文のままコピーリング載るのが一番正しく

い方法かとも考えますが、古い印刷物であり、
特に旧字体が使われており、字形が難解

な面がありますので、ワープロで打ち直して、
写真植字印刷本をつくりました。(ふる里通信

も同様な写真で印刷されています。この方法が
発刊の為に最も費用がかからないやり方ですが、

誤字脱字など、あやまりが生じる事もあります。
ます。)

年に一度、十一月第一日曜日ごろに、中川根町産

おわりに

徳山の地名は、土岐山城(守)から名付けられたと言われます。土岐氏

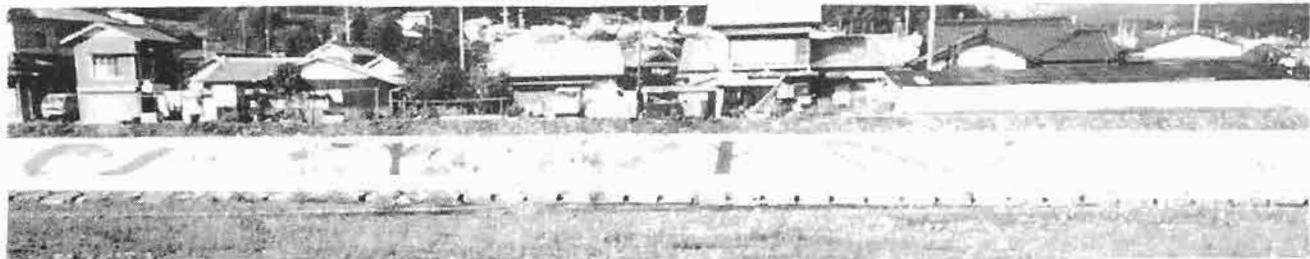
の直系を名乗る人が、この地に居なくなりと/orても、南北朝時代戦いに敗れはしても、無双連山を中心として散在する
幾多の集落を「戦い」以前数百年、そして以後数百年、徳山地区を中心にして土岐氏は治めていたのです。「戦い」の後
変わりゆく支配者に従いながらも、山家の人々を治め、に
かれた、と言う事は、我が中川根の大祖先である事は、ま
ちがいありません。

徳山神社(旧名天王社)の神御木や二舞、浅間

神社の鹿の舞などは、今川氏の流れを汲む文
化だと言われていますが、同神社の創建の古

さへ仁和元年(ハハイ)天王社、天喜三年(ハハイ)浅間社
からも、土岐氏が民衆に残してくれた文化だと考えられないでしょうか。

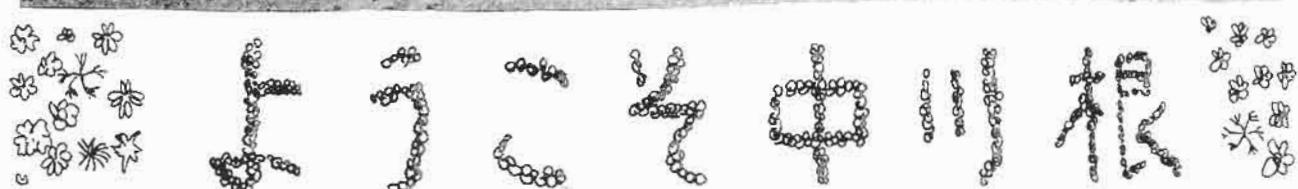
無双連山に徳山城のあとが、六五〇年を経
た現在も残っています。沼館先生が「結言」で
申された、「この遺跡の保存を図るとともに、
事蹟を解明し……」それから、戦争・貧困
絶望……暗い余裕のない時代が続きました。
いま、わが町の歴史の源ともいえる徳山城址
の保存を切望しております。



長尾川、上長尾側堤防のコンクリート壁に壁画がえがかれています。

長さ約250m、中川根の四季の様子と、長尾川の源の一部、尾呂久保の伝説、おうちを題材にした、50m画もすばらしいものです。小学生、中学生、川高生、一般の皆さんか。

8月の暑い日、情熱を込めて、書きました。期会がありましたら是非ご覧下さい。



塙郷と地名の間の県道 島田、本川根線のわきに、中電水路トンネル土捨場があります。そこに、木の植込字(つじ)で、上記の様なものが車の往来の時、ちらっと見えて、樂しませてくれます。まわりは、穏やかな草花が咲いています。春になつたら、どんな花をつけてくれるのでしょうか。樂しみですね。

江戸時代後期の文化九年(一八一三)島田の住人桑原藤泰は大井川東岸を十四日かけて歩き、紀行文「波摩都豆羅」大井川源紀行を書きました。

今度町史研究会で再版本を発刊致しました。当時の集落の戸数や神社寺院名、住らしの様子、おもしろい話などを書かれています。島田から本川根町梅地まで行きかたりは内陸部を通っています。

中川根も旧徳山村をくわしく書いています。文体は古文にて、いささか読みにくいですが、活字ぶりがはもつります。

お求めにぎりたい方はご連絡下さい。
一冊 五口円(手は別)
連絡先 中川根ふる里通信係



お詫び申上げます

二十六号「夏の号」におきまして、誤りがございました。
今回、紙面にて失礼とは存じますが、載せていただき
お詫び申し上げます。

表紙・町村合併屋台及び高郷商店街・写真提供者は、
諸田秀男さん(高郷地区)でした。

十一ページ出版会社アスラン書房の藤本都子さん
出身校は日本女子大学ではなく早稲田大学でした。

紙面誤りではありますまいが、同封致しました東海四県ふる里產品紹介のパンフレット・中川根町四季の里自然化粧品の郵便振替用紙(赤い印刷)が定期講読料請求とまぎらわしく、重ねてのご送金をいたいたいの方もありました。今回
通信にてご連絡させていただきます。

かえでの類はもちろんですが、さくらこぼくぬるーえのくなども日々その装いを変えて行く様子は日々驚かせてくれます。

大礼山、山伏坂方面は里山より一ヶ月も早く紅葉でしたが
十月末より十一月初めにかけて沢山の車が登りました。
そちらの様子は又一段と見事なものでした。

今回は落葉に変って写真を入れさせていたたきます。
どうぞご覧下さい。

ふる里通信何時まで読ける?との疑問されますが、いら
しゃるかも知れません。まず五年と志して一つのハードルを
越えました。次のハードルは十年と志しております。
来年は八年目。私も。。。坂と八年もこうけ落ちてしまい
ずタ仕事がスローモーになつたなどの自覚も多分にあります
が、元気ですから頑張ってみたいと考えます。どうぞよろしくお願ひします。

こんな話題が見聞したい、又投稿・寄稿
あります。では良いお年をお迎え下さい。



光陰矢のごとし、秋の深まりとともに初冬のたたずまいにな
でしまいました。十月に周辺に予期せぬ出来事が起つて、

久しぶりにインフルエンザが家中にほびこって、長々といて
くれますて、ふる里通信の発刊がたゞへんおくれてしまいま
した。申しわけありませんでした。